

# 協働がつくる

# わたしたちのまち

最終回

美しい自然を子どもたちに残したい

エコ・グリーンいばらきは、地域の環境整備や緑化の推進を目的とするNPO法人として、平成16年に活動を始めました。

主な活動の場である木戸房池の周辺は、活動当初は草や木が生い茂り、とても人が入っていくことができない状態でした。そこで、自分たちの手で里山をきれいにしようとして、地域の皆さんにも呼びかけ、少しずつ整備を始めたのです。

昨年11月に実施した二里山整備エコ・アツ



分担してごみ拾いの作業を進めます



大きなごみは重機を使って取り除いていきます

## NPO法人 エコ・グリーン いばらき



エコグリーンいばらきの  
会員の皆さん

「プロ作戦」では、さまざまなボランティア団体や地域の自治会が参加。約90名の方が、ごみ拾いや林の整備を行いました。不法投棄された大型のごみは、県産業廃棄物協会とも連携して搬出。また、間伐材は機械でウッドチップにして遊歩道にまくなど、資源を再利用しながら、環境整備を進めています。

「多くの人や団体の協力があつての活動。みんなで力を合わせて、まちの大切な財産である里山を、美しい姿にして子どもたちに残したい」と、活動に込める思いを話す代表の大場國行さん。本来の生態系を取り戻し、水に親しむ憩いの場にしたいと考えています。

今ではコグラやカワセミの姿が見られるようになった木戸房池周辺。一つ一つの活動の積み重ねが、地域の自然を守り、育んでいきます。

問合せ エコ・グリーンいばらき(0266-906505)または地域振興課(0262-91051)

## 水戸の遺跡を歩く 第6回

### 骨壺にみる古代人の「死」 向井原遺跡



埋蔵文化財センター  
キャラクター  
ダイダラボウの  
つねずみひろし  
常澄大

双葉台には、かつて向井原遺跡という遺跡がありました。昭和48年に行われた発掘調査で、その一角に、平安時代の火葬墓が21基発見されました。当時の調査記録によると、中には幼児の火葬も見られたようです。興味深いことに、骨壺やその蓋には、当時の日常雑器である甕や皿、椀などが使われていました。

火葬は、仏教と深い関わりのある風習と、一般的には考えられています。しかし、6世紀半ばに日本に仏教が伝わって、すぐに火葬の風習が始まったわけではありません。『続日本紀』には、文武天皇4年(700年)に、僧侶の道昭という人が火葬されたという記事があり、一般的にはこれがわが国最初の火葬であったといわれています。つまり火葬の風習は、8世紀以降に始まったものなのです。これは、大化の改新以降から始まる新しい国づくりの際に、儀礼・風習を積極的に取入れようとした当時の権力者たちが、日本列島全体に影響を及ぼした結果であると考えられます。

茨城県域においては、奈良・平安時代の火葬墓は、水戸市を中心とする那珂川中下流域と霞ヶ浦沿岸地域に集中し、その他の地域ではあまり多くはみられません。この2つの地域で火葬の風習が盛んになったのは、交通の便がよいために情報の伝達が早かったこと、地域の先駆者が、最先端の風習を模倣することで、主張、あるいは優位性を地域社会全体に示そうとしたのではないかとということが考えられます。埋葬とは、故人を偲ぶため

だけのものではなく、故人が死してなおも権力を示す意思表示として必要なものであったのです。

(文化課埋蔵文化財センター)

文化財主事 渥美賢吾



向井原遺跡出土の骨壺